

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：33916

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12356

研究課題名（和文）英語のthat痕跡効果と反that痕跡効果についての史的統語論的研究

研究課題名（英文）A syntactic study on the facts of the that-trace effect and the anti-that-trace effect and the changes of their existence in the history of English

研究代表者

近藤 亮一（Kondo, Ryoichi）

藤田医科大学・医学部・准教授

研究者番号：30803225

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、that痕跡効果と反that痕跡効果に関する歴史的事実やそれらの有無に関する変化に対して、生成文法の理論的枠組み（Labeling Algorithm）の下で分析を行った。本研究では、これらの歴史的事実や変化に対して二つの分析が提案された。一方の分析では、補文や関係節におけるthatの発達に注目し、他方の分析では、主語位置や節構造の変化に注目した。また、本研究の分析の一つとして、初期英語における関係詞がない関係節や古英語の関係節の特殊な例についても分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、that痕跡効果と反that痕跡効果に関する歴史的事実とそれらの有無に関する変化について、比較的最近の理論的枠組みの下で考察しているため、生成文法理論に基づいた史的統語論的研究に対して理論的な貢献を果たすことができたと言える。また、本研究の成果の一部では、コーパスから得られた関係節に関する新しい事実を提示しているため、経験的な貢献も果たすことができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the facts of the that-trace effect and the anti-that-trace effect and the changes of their existence in the history of English within the framework of Labeling Algorithm. In this study, two types of analysis are proposed for them: one focuses on the development of that in complement and relative clauses, and the other focuses on the change of the subject position/the clausal structure. This study also analyzes relative clauses without relative markers in early English and particular examples of relative clauses in Old English.

研究分野：英語学

キーワード：that痕跡効果 反that痕跡効果 Labeling Algorithm 関係節

1. 研究開始当初の背景

これまで多くの研究者により注目されてきたように、英語では先頭に *that* を持つ補文 (*that* 補文) からその主語を主節に移動させ、その痕跡が *that* のすぐ後に来るような形が生じると、そのような文は非文法的なものになってしまう。これに対して、*that* を持たない補文からその主語を主節に移動させても文は非文法的にはならない。この現象は *that* 痕跡効果と呼ばれる (e.g. Perlmutter (1971))。Chomsky (2013, 2015) により提唱された Labeling Algorithm という理論的枠組みにおいて、*that* 痕跡効果は、*that* 補文からの主語の移動により関連する構造のラベルが決定できないことで生じると分析される。

一方、主格関係節が *that* を先頭に持つとき、空所が *that* のすぐ後にあるように見え、主語が移動した *that* 補文と同じような配列を持つように見えるが、そのような主格関係節は文法的である。これに対して、主格関係節が *that* などの関係詞を含まないとき、そのような文は非文法的になってしまう。この現象を反 *that* 痕跡効果と呼ぶ (e.g. Bresnan (1972))。関係節内の空所は移動により形成された痕跡であると仮定されている。主語が移動している *that* 補文と *that* が先頭にある主格関係節 (*that* 主格関係節) が同じ構造を持つのであれば、上記の Labeling Algorithm に基づいた分析は、実際には文法的である *that* 主格関係節も排除してしまうだろう。

また、興味深いことに、初期英語では *that* 補文から主語の移動が生じている例 (e.g. 縄田 (2013)) や、*that* などの関係詞を欠いている主格関係節 (ゼロ主格関係節) の例が発見されている。このような歴史的事実を考慮すると、補文においては「*that* 痕跡」が許されなくなり、主格関係節においては「*that*・ほかの関係詞 痕跡」が必要になったということになる。

以上のような背景があり、研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語史における関係節の *that* やゼロ主格関係節について調査すること、補文と関係節における *that* の変化に関する違いを明らかにすること、そして、Labeling Algorithm に基づき *that* 痕跡効果と反 *that* 痕跡効果に関する統語的メカニズム・歴史的变化を分析することである。

3. 研究の方法

先行研究やコーパスから、関連する現象・構文に関する歴史的事実を収集する。先行研究で提案されている理論的枠組みや理論的仮定を吟味し、それらに基づいた理論的分析を歴史的事実に対して考案する。

4. 研究成果

本研究では、主に、*that* 痕跡効果と反 *that* 痕跡効果に関する歴史的事実やそれらの有無に関する変化 (*that* 補文から主語が移動することは、現代英語では許されないが初期英語ではそのような例 (cf. 縄田 (2013)) が存在したという事実や、主格関係節は現代英語では関係詞を必要とするが初期英語では主格関係節に関係詞がない例 (cf. 内田 (2021)) が存在したという事実) についての分析を考案し、初期英語における関係節などに対する分析を行った。以下では、本研究の中心的な成果をまとめる。

(1) まず、当該の歴史的事実・変化に対する *that* の発達に基づいた分析をまとめる。

現代英語における *that* 痕跡効果に関する先行研究では、T は弱い要素でありそれだけではラベル付与に参与できないと述べられ、*that* 補文において主語が移動してしまうと関連する構造のラベルを決定できないと分析されている (e.g. Chomsky (2015))。また、先行研究では、CP 領域における *that* の位置の変化やそれが持つ指示詞の性質などの消失について論じられている (e.g. Gelderen (2004, 2011), Kondo (2017))。これらの先行研究の考えに基づき、Labeling Algorithm の下、主語の移動が生じている初期英語の *that* 補文の派生においては、指示詞の性質を伴う *that* により関連する構造のラベルが決定されると分析した。

主格関係節・反 *that* 痕跡効果に関しては、関係節における *that* (指示詞) の変化 (cf. Gelderen (2004))、関係節の派生 (cf. Tozawa (2019))、初期英語の動詞移動 (e.g. 縄田 (2013), Tanaka (2002))、動詞移動によるラベル決定 (e.g. Goto (2017)) などに関する先行研究に基づき、分析を行った。この分析では、現代英語の *that* 主格関係節の派生においても *that* が当該の構造へのラベル付与 (と T の強化) を可能にするとした (see also Auwera (1985))。また、ゼロ主格関係節に関しては、T への動詞移動により当該の構造のラベル決定が可能であったため、それが派生可能であったと論じた。英語において動詞移動が生じなくなると、当該の構造のラベルを決定することや T を強化することが不可能となり、ゼロ主格関係節が派生不可能となったと分析した。

上記の分析の過程において、補文の *that* と主格関係節の *that* は、前者は指示詞の性質を英語史のある時期に失ってしまうが、後者はそれを現代英語においても持っているという点で異なるとした。

(2) 次に、当該の歴史的事実・変化に対する主語位置や節構造の変化の観点からの分析をまと

める。

先行研究では、英語の言語タイプ・主語位置の変化(e.g. 縄田 (2016))や初期英語における動詞移動(e.g. Nawata (2009), 縄田 (2013))について論じられている。この主語位置や節構造の変化を考慮して、Labeling Algorithm の下、再投射(e.g. Surányi (2005), Maeda (2014), Kondo (2017))や素性継承(e.g. Hayashi (2020))などに関する先行研究の理論的仮定に基づいた派生を提示し、それに基づき当該の歴史的事実・変化に対する分析を検討した。

初期英語における that 補文からの主語の移動に関しては、概略、主語が CP 領域に移動しそこで関連する素性への値付けやラベル決定に関与することができたためそれが可能であったと論じた(see also 縄田 (2013))。

現代英語の主格関係節を扱っている先行研究では、ゼロ主格関係節を形成する際の主語の移動により、それらのコピーを同一物として解釈できない構造が形成されるため非文法性が生じるが、that がある場合はそのような構造が形成されることはなく非文法性は生じないと論じられている(Anti-Self-MERGE (cf. 林 (2020)))。ゼロ主格関係節に関しては、ラベル付与、再投射、Anti-Self-MERGE という理論的仮定に基づき、英語の言語タイプが変化する前では、先行研究で論じられている構造が形成されなかったためそれが可能であったと論じた。

(3)最後に、初期英語におけるゼロ関係節や、古英語における that (指示詞の中性単数形)を関係詞として含む関係節に対する分析をまとめる。

多くの先行研究では、ゼロ関係節の構造は関係詞を持つ関係節のものよりも小さいと述べられている(e.g. Bošković (1997), Doherty (2000), Rizzi and Shlonsky (2007), Hayashi (2022), 縄田 (2022b, 2023))。また、現代英語においてゼロ関係節は先行詞と離れた位置に外置されることはできないとも述べられている(e.g. Bošković and Lasnik (2003))。カートグラフィーという理論的枠組み(e.g. Rizzi (1997))を用いた先行研究(e.g. Douglas (2017))の分析に基づき、ゼロ関係節は、比較的小さい構造を持ち、先行詞と局所的関係にあることで関係節として解釈されることができると論じた(see also Nawata (1999), 縄田 (2013))。

コーパス調査では、初期英語においてゼロ関係節が外置されている例を発見することができた。これに対しては、上記の仮定に基づき、初期英語のゼロ関係節は現代英語の例よりも大きい構造を持つ可能性があるとし、関係節の変化に関する先行研究(cf. 縄田 (2022b, 2023))に基づき、英語史においてゼロ関係節の構造は縮小化してきたと論じた。この方針に沿って、カートグラフィーや Anti-Locality という仮定(e.g. Erlewine (2016))に基づき、初期英語のゼロ主格関係節についても考察した。

古英語における that (指示詞の中性単数形)を関係詞として含む関係節に関しては、先行研究(e.g. 縄田 (2022a))で提示されている、関係詞である指示詞が先行詞と形態的に一致している関係節の派生とは異なる構造を持つと仮定した。この分析では、当該の要素を補文標識ではなく指示詞であるとみなし、それは単独で関係節内に導入され先頭に付加する(Internal Pair-Merge (e.g. Chomsky (2004)))と仮定した。この操作により当該の指示詞が持つ ϕ 素性が不活性化し、それはデフォルトの一致形態である中性単数形となると論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 近藤亮一
2. 発表標題 初期英語における関係節の構造に関する一考察 ゼロ関係節の分布と関係詞の形態パターンに注目して
3. 学会等名 第9回史的英語学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 近藤亮一
2. 発表標題 英語におけるthat痕跡効果と反that痕跡効果の歴史的变化について
3. 学会等名 日本英語学会第39回大会ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近藤亮一
2. 発表標題 関係詞thatの歴史的变化と反that痕跡効果
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会ワークショップ
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中 智之、茨木 正志郎、松元 洋介、杉浦 克哉、玉田 貴裕、近藤 亮一（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 言語の本質を共時的・通時的に探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------